

MARUMO LIGHTING NEWS

春

■1980—1 VOL—33

'80年代の うねりを構成するキーワード。
やる気 パワー バイタリティ。
行動に裏打ちされた理論。
理性と感性の一致。積み重ね、充実。
生き生きとした生活。

波に洗われる世界——産業界だけでなく。
職人仕事の場合も教育界も、
家庭をきりもりする主婦の間も
まして芸術の分野も
沖から押し寄せる大きな力に もまれるだろう。

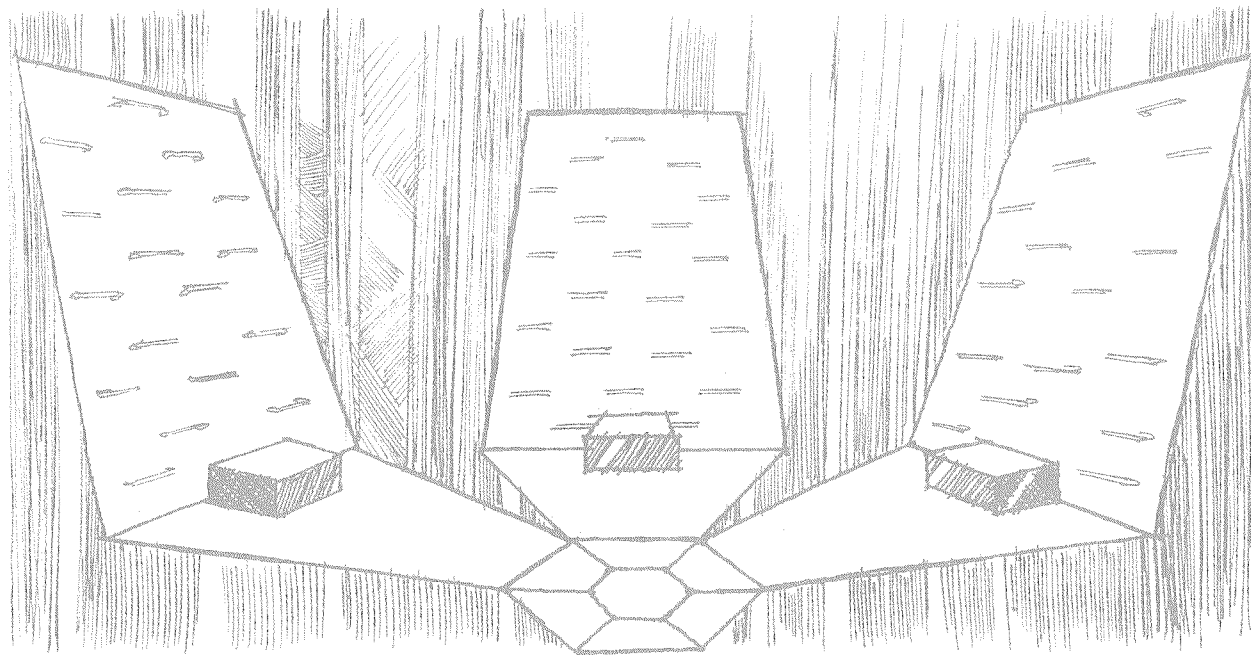
生き方の意義が問われる理知的な時代に入った。
言ってみればチャンスはあちこちに。
もう、人々が歯車だった時代は終り
考動する葦が評価されようとしている。



東京演劇アンサンブル公演「奇蹟の人」

東京演劇アンサンブル公演

「奇蹟の人」でのぼくの照明のしごと



薄井澄夫——●東京舞台照明

ぼくが東京演劇アンサンブルの芝居づくりにつきあうようになったのは、もう10年以上も前のことです。プランナーとしてのしごとをするようになってからでも7年は経っていますから、年間3本ないし4本の上演があったとして、おもえばぼくはいつのまにか20本以上の作品を手懸けてきた勘定になります。演出家やスタッフの人たちの気心もなんとかのみこめ、この劇団の芝居のつくり方もよくわかるようになってきたと思います。

今回の演出は広渡常敏氏です。照明に対する考え方も非常にうるさい人なので、ぼくにとっても勉強になりますし、うかつに照明をつくると大変ですが、それだけにやりがいがあります。

舞台づくりにおける照明家の役割

ぼくは、舞台づくりにおける照明家の役割は、協同作業のなかで、あくまでも演出を補助することにあると思います。もちろん照明家も台本を研究しなければなりませんし、実際の作業がはじまるまでには、いろんなイメージを持つものです。しかし、照明プランだけが先行しても実際に即したプランづくりはできませんから、照明家が先走るのはよくないことだとぼくは考えています。照明というしごとの分野は、舞台装置が決まり、平面図が出来、役者の動きがある程度決まらなければ、具体的なプランニングは出来ないものです。そこで、照明家は

プランの作成まで可能な限り何度も稽古をみななければいけないと思います。

実際には、照明のプランナーやオペレーターが忙しすぎて、なかなか稽古にずっとつきあうわけにはいかない現状がありますが、ぼく自身は立ち稽古に入ってから、出来る限り、稽古をみることにしています。

ぼくは、照明家というのは立ち稽古から入って行って、徐々にプランに具体性をもたせてゆくものだと思います。稽古を何度も何度もくりかえしみると、イメージそのものに発展があります。そしておのずと芝居のきっかけもわかってくるようになります。

それでは今回の「奇蹟の人」の場合のぼくのしごとについてお話ししましょう。

「奇蹟の人」の照明プラン

東京演劇アンサンブルの「奇蹟の人」は、これまで既に、同じ脚本、同じ演出家で、何百回も上演されてきた舞台の、いわば改定版です。この新しい舞台では、舞台装置も音楽も時代感覚にフィットした、前回の舞台とはまったく違ったものになりました。舞台装置が変わるということは、必然的に役者の動きも変わりますし、照明もそれに応じたプランをつくらなければなりません。

ぼくのしごととしてはまず、舞台装置家のプランニングとして決定している舞台装置で使用する素材選びから参加しました。

装置家の基本プランとして舞台装置の模型が既にできていました。それは、鏡のような反射板で出来ていて、三面鏡のようにでき上っています。さらに床面にも鏡がはってあるといったようなものです。(図参照)

この装置家の浜本義行氏は装置の材質を決めるための見本をたくさん持ってきていました。

討議の結果、アルミ板のようなアクリル板に決定しました。しかし、これは正直に言って、ずいぶん照明家泣かせのむずかしい素材です。光を反射する材質と舞台空間の使い方がからんで、ぼくにとって難しい問題です。

この芝居は、基本舞台のなかで、小道具の動きによって場面を変化させていきます。具体的な小道具は、水の出るポンプ、食堂のテーブル、イス、ペーパーベッド等だけであって、他は、舞台装置と同じ素材を使った台の移

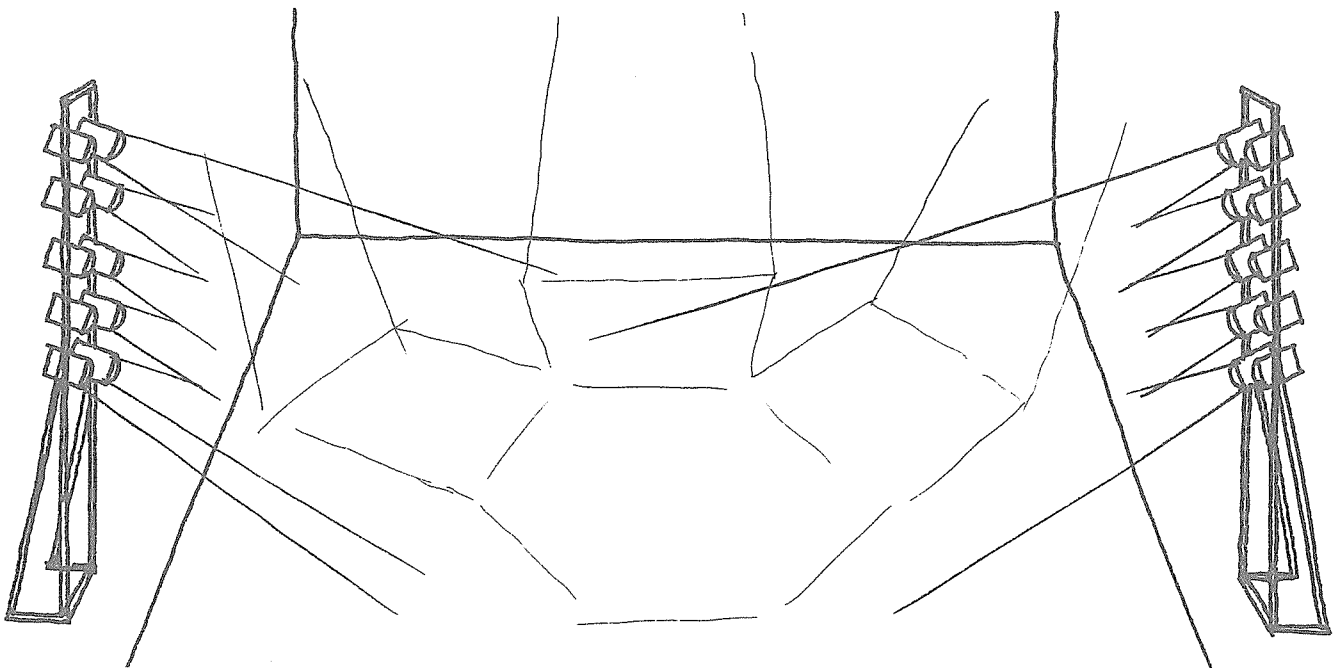
動と照明の変化でみせるわけです。したがって演技空間は、この基本舞台全面をいろいろな形で大きく使っています。

その上さらにアクリル板の壁には多数の手すりがついており、役者の動きは床面だけでなく、これによじのぼる上下の立体的な動きも加わります。

照明は基本的に役者の演技を観せなければならないので、このように大きく動く芝居をすべてフォローしなければならないわけです。

しかし、この基本舞台の素材が鏡のような反射板であるために、これにあかりを当てれば当然、光は反射しますから、観客の眼にじかにまぶしい光りがとびこんでしまうという事態がうまれます。そこで、どの方向から光りを当てれば、それを避けることができるかということが問題になってきます。しかし、そのことを考慮にいと今度は、上から当てても前から当てても、光りのエリアが相当に限られ、あかりがきれてしまう部分がでてくるということになります。これでは、舞台全面が演技エリアであるのに、あかりがなくてみえない部分ができて、困ったことになってしまいます。

上からのあかりは、客席には反射しないが^面あかりとして、役者の顔がみえにくいという問題があります。そこで、前からのあかりをつくると客席に光りが反射してしまう。それをきらうと、どこから当てても光が散漫になり、どんな照明をつくっても変化のとぼしいあかりになってしまいそうなのです。



前タワーの設置による横からのあかり

さて、これらの諸問題を解決するために、ぼくはタワーを使用しました。装置図を見ていただければわかると思いますが、横からのあかりには逃げ場所があるのです。

ステージスポットを20台も30台もつかうのは大変ですし、第一この芝居では、舞台転換のじゃまにもなります。そこで、スポットをたくさん吊れるタワーをつくってもらいました。

舞台の上手、下手、各々の袖に高さ2間のタワーを設置し、ここから、前あかり（フロント、シーリング等）のとどかない演技空間にあかりをおくりこむことを試みたわけです。地あかり的なもの、単独サスのものを、タワーのスポットでつくりました。サスで吊れないところをタワーでおぎなうというようなことをしたわけです。そして一方では、タワーからのあかりもつかって、反射を逆に利用し、おもしろいあかりをつくることのできないかというふうに考えを進めていきました。

反射光の利用

たとえば、反射を利用したあかりの例として、最初のプロローグの場面をあげることができると思います。

この最初のケラー家の場面だけは、独立して時代が古いわけです。そこでぼくとしても、それ以後の場面のあかりとちょっと感じの違うあかりにしたいと考えていました。

打ち合せのとき、演出の広渡氏は面白い表現をしました。50年前、60年前の写真のセピア色がかったような感じが出せないかということです。

演出家はイメージで注文を出してきたりすることがあります。照明家には、その感じでいわれたものを現実につくるという職人的な要素もあると思います。

イメージというのは無理な面もあるのですが、演出家の求めている感じはよくわかります。ぼくは自分なりにそれを解釈して、色とモヤモヤとした光りの感じで作ってみようと考えました。そこで、人物に直接あかりを当てないで、タワーから床面に当たった反射の光りで人物をみせることで、この場面をつくったのです。これは反射を逆に利用してみた例です。

光りの反射ということでは、ほんとうに苦労したのですが、それだけに新しい発見や面白いあかりをつくることも出来たと思います。

ぼくの気に入っているあかりは、8場の食堂の場面です。このシーンは、最初ごくふつうのフルライトですが

オーバーラップでカベ当てのあかりを使いました。タワーのあかり及びフットスポットで、今までとは逆に全体をギラギラ反射させています。ここで、今までの照明の感じを一変させて、アニーとヘレンの闘いの場面を側面から応援しているのです。芝居の上でもこのシーンは、芝居の中心テーマを表現している箇所であり、広渡氏もこういうあかりがふさわしいと考えたと思います。

このようなあかりは、現場でやってみないと予測のつかないこともあります。しかし、おもわぬ効果が出ると、照明家として、それが喜びでもあるわけです。このあかりは、今回のあかりづくりのひとつのポイントになったと思います。

劇的なリズムと照明

照明というのは、あくまでも演出の補助的なものなのですが、舞台稽古において、実際にあかりが入ったものを演出家がみて、あかりにあわせて、役者の動きを変えることもあります。今回もある場面では、広渡氏が最初のプランを変えて、F.I. F.O・F.I・F.Oという形でいくところを、サスのオーバーラップで続けていくために、役者の動きを変更するというようなこともありました。それによって芝居の流れがよりスムーズになるので変更したのだと思います。

また劇的なリズムにそった工夫を照明がしなくてはならない場合もあります。

今回でいえば、たとえば狩猟小屋の場面をあげることができます。ここではじめて1.5KWのFQという器具を使っているのですが、これは、狩猟小屋のシーンの役者の動きが、それまでの他の役者の動きと殆んど同じで似ているために、あかりも似たようなあかりになってしまうのを、この器材をつかうことによって避けて、芝居に照明でリズムとアクセントをつけているのです。シーンごとに色でイメージを変えていくのもひとつの方法ですが、それでは器材がたくさん必要です。いかに少ない器材ですませて、よりよい効果をあげるかを、考えるのも照明のしごとです。

色の話が出ましたので、今回の照明の色についても少しだけ触れておきましょう。

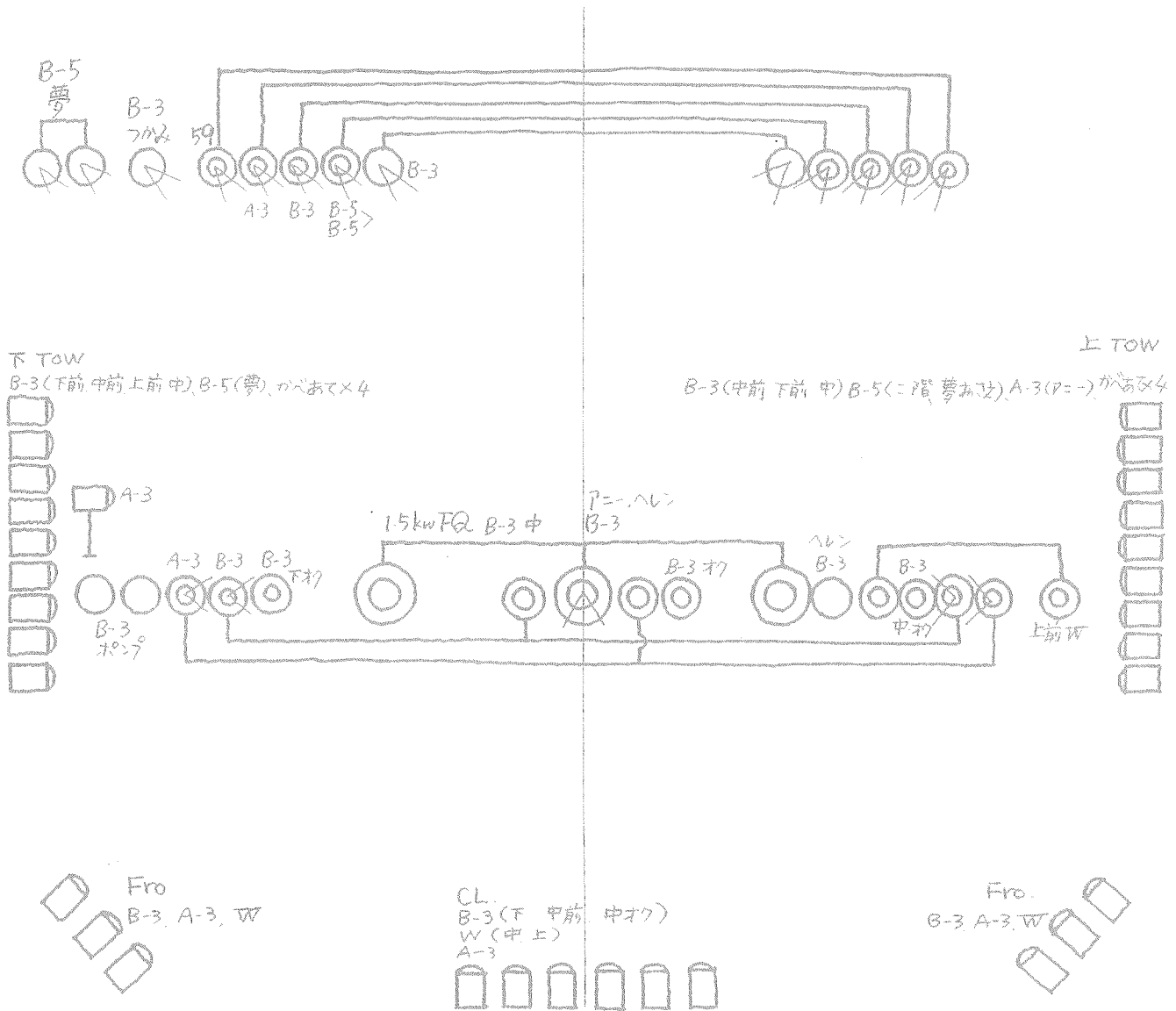
図面でB3と書いてある色は、ぼくは色として使っているのではなく、生あかりの代りに使っている薄いブルーです。この芝居では、生あかりを活かしていきたいと考えていたのですが、生あかりは絞ったとき、無色というよりは赤っぽく見えるので、ぼくはB3をいれたものを、生を使う意識でつかっています。

限られた紙面でほんの一部についてしか触れることができませんでしたが、ぼくは、今回の「奇蹟の人」の照明プランのつくり方の概略を述べてきました。

今回の照明プランはアマチュアの方には、特殊なものだと思いますので、みなさんの参考に直接つながるかどうかが、ぼくにはわかりません。しかし、きっとみなさん

も面白い素材をつかった舞台装置に興味をお持ちでしょうから、たとえば、光が反射してしまう鏡のようなものを使うこともあるかもしれません。そんな場合には、何かの参考に少しでもなれば、と思います。また、ぼく達照明家のしごとの実際に興味をお持ちになり、理解していただければ幸いです。





Fro フロントサイドスポットライト
CL シーリングライト 客席上部天井より主として演技者の顔を明るくする。
TOW タワースポット 舞台前方側側面より舞台と平行に照射す
 ◎ サスペンションスポットライト (フレネルレンズ) この略号は通常地明りとして3~4台を等間隔にならべて舞台面を明るくする。

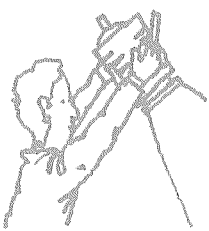
○ サスペンションスポットライト (平凸レンズ) 演技空間の照明に使用する。
 □ スポットライト (平凸レンズ)
B-3 映画およびテレビのカラー撮影のとき使用する特殊フィルター。専門的には色温度変換フィルターといい、Bはブルー、Aはアンバーの略である。
B5 B5 はB5のフィルターを2枚重ねたことをいう。
W 生あかり

カベアテ 上手から下手のカベに、又下手から上手のカベに向けて照明する。
 ◎ サスペンションスポットライトの光の方向を表わす。方向指示のないものは真下。

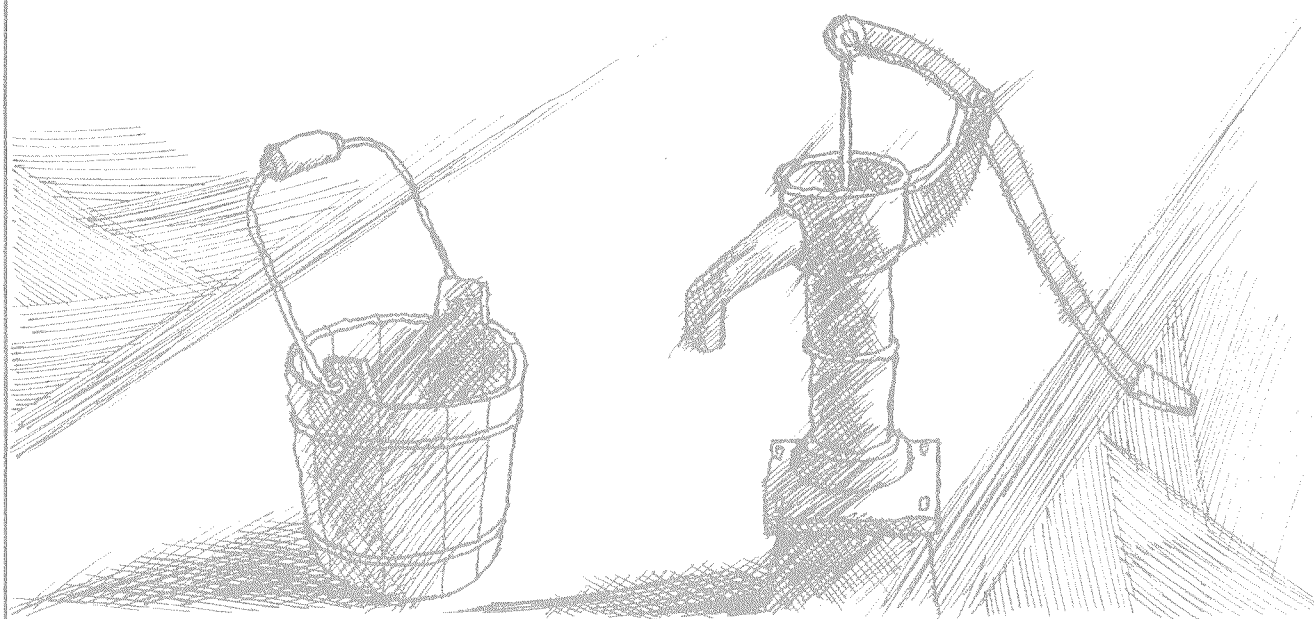
シーン	Fro	△	CL	Tow	◎	CL	Tow	Tow	◎	◎	CL	Tow	◎	CL	Fro	◎	△	CL	CL	◎	△	△	△	△	△	△
	B3	B3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	A3	A3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3	FB3
①ケラー家夜 F1 FO				5			5						3		10											
タイトル 1.																										
2.																										
3. FO																										
②停車場 S.I S.O			10	10		10	10	10	10		10	10														
③ケラー家前庭 F.I F.O	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10													10
④アニーの部屋 F.I F.O						10	10	10	10	10	10	10	10													
⑤ケラー家前庭 F.I					10																					
⑥食堂 O.L					0						10	10	8						10	10						ニ階 B3
前庭 O.L			10	10	10		10		10	10	4	4	4						0	0						10
O.L F.O			0	0	0		0		0	0	0	0	0													10
⑦アニーの部屋 F.I	5	5	5	5		5	5	5			5	5		10	10	10	10									
アニー残し F.O F.O	0	0	0	0		0	0	0			0	0		0	0	0	0									カクマ
⑧食堂 F.I	10	10	10	10	10	10	10	10	10		10	10	10													
O.L F.O	0	0	0	0	0	0	0	0	0																	
前庭 F.I F.O	10		10	10		10	10		10		10	10														
⑨二幕																										
⑩アニーの部屋 F.I																										
⑪扉 開い O.L S.O	10	10	10	10	10	10	10		10	10	10	10	10	10	0	0	0									
⑫狩猟小屋 F.I F.O						10	10	10	10	7		10														
F.I F.O																										
F.I F.O				10		10	10		10	7		10														
F.I F.O																										
F.I				10		10	10		10	7		10														
O.L									6																	
O.L									0			10														
O.L				10			10																			
O.L				0																						
O.L									0																	10
⑬食堂と庭 O.L							10				10	10	10						10	10						0
	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10					10	10						
	5	5	10	10	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5					0	0						10
F.O	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10												10

Qシート 左側上から脚本の指定により

- ① ケラー家の夜 F1 (真暗な舞台から次第に明るくなる) で始まり、FO (明るい照明から徐々に暗くなる) で終る。
- ② 停車場 S I (一瞬で舞台の照明を点灯する) で始まり F1 で終る。
- ⑥ 食堂 O.L オーバーラップ (重複する意) 舞台照明では暗転をしないで明るいまま照明を変化させる。



人間に生きる力を ぼくたちの仕事「奇蹟の人」



佐々木章 ———— ●東京演劇アンサンブル

東京演劇アンサンブルは、学校公演を初めてから15年余の歴史をもっています。その間、さまざまな芝居を創り、全国で公演を重ねてきました。『奇蹟の人』もこのなかで創りだされた舞台です。

『奇蹟の人』の上演は、1971年に東京で初日の幕を開けました。それから74年までの4年間と、78年に再演されて79年の2年間、延6年間、全国各地北海道から沖縄までのさまざまな所で、一般公演・高校・中学公演を続けてきました。80年・81年とこれからも続けてゆく予定です。

劇団がこれまで20数年間、たくさんの舞台を創ってきましたが、『奇蹟の人』は、最高の公演回数を積み重ねつつあります。この芝居は、それだけの要求に答え得る魅力をもったもので、観客に感動を与えることのできる、人間に生きる力を与える舞台です。

『奇蹟の人』には、実在した人物ヘレン・ケラーが登場します。「見えない」、「聞こえない」、「しゃべれない」。三重苦のヘレンが、アニー・サリヴァンという家庭教師

によって人間にかわってゆく、周囲の家族の暖かい愛情につつまれながら、自覚した一人の人間として成長していくさまをえがいた物語です。

〈ことば〉は獲得するもの

この芝居は、単にヘレンの伝記をえがこうとしたものではありません。私たち東京演劇アンサンブルが、今、考えていること、やろうとしていることを、ヘレン・ケラーという題材を得て、その中で表現しているのです。

この芝居に、サブ・タイトルとして「ものには名前がある」という言葉をつけました。劇団で考えたことは、まさにこのことです。ここにポイントを置き、ヘレンとアニーとの人間対人間の闘いをえがきながら、2人がこれを獲得するまでの生活を表現したかったのです。

「ものには名前がある」これは、人間にとっては原則的なものです。教育の原点です。このことから、物事を判断し、何かを掴みとることができるのです。この芝居

の脚本・演出の仕事をした広渡常敏は、劇団のパンフレットに次のように書いてます。

「——月頃、ぼくらはたいした不自由もなくことばを喋っているのに、ことばというものをまるで自分の思いどおりに、奴隷のように使えるものだと思っていはしないだろうか？

考えてみるとたしかにそうです。自分の従属物のようにことばを喋っていることがあります。そのために、ことばについての感性が汚れてしまうんです。

演劇人はことばの専門家だと思われるかもしれませんが、だが果してぼくらは、ことばというものを大切にしていたらどうか？ それとむかいあっているといえるだろうか？

ことばは数万年という長い間かかって人類がつくりだしたものです。ことばを獲得することによって、人間がはじめて人間になったとも言えるのです。ことばが人間の感情をつくりだし、人間の思想をつくりだしているのです。

そうです。ことばは獲得したものなのです。決して生まれながらにして体の中につまっているものではないはず。ことばは人間の体の外にあるものなのです。それとむかいあって、ことばと格闘することを通して、人間の感情や思想が人間的に美しくなるのです。ゆたかな想像力やビリビリ震えているような露出した神経や溢れるほどの感受性——それなしには芝居も芝居でなくなっ

てしまうのですが、俳優の仕事にとって欠くことのできない繊細さ、想像力・感受性と、ことばとの関係について、『奇蹟の人』は根源的にぼくらに問いかけてくるのでした。(中略)

人類がつくりだしてきた文化や歴史とともに、ことばはぼくらの前に存在しているのです。それとむかいあうことによって人間の文化と歴史を、客観的世界の法則を、ぼくらは獲得することになるわけです。」

この文章にあるように、『奇蹟の人』の舞台は、人間にとってことばとはなにかという根源的な問いかけをもつ物語です。物事を把握する時に、原則から理解してゆかなければならないことの重要性を表現しているのです。

〈ことば〉は心の扉を開く

ヘレンにとっては、ものに名前がある、ことばというものが存在することを理解するまでが大変だったわけです。アニーは、ヘレンを教育していくとき、つねに次のようなことを考えていたと書いています。

「言葉は何という不思議なものでしょう。そのくせ私たちには、それを考えることが、きわめてまれなものです。言葉は人生におけるもっとも驚歎すべき事実の一つであります。語られた言語、あるいは書かれた言語によって、思想は心と心の隔ての垣をとび越えて行きます。しかもこの奇蹟に驚く人は少ないのです。簡単な、小さ



アニー (凝視したまま) ……………
ヘレン (アニーの手を捉えて指文字を書く)
W A T E R
アニー そう。

い鍵をもって、私たちは互いに心の扉を開くことができるのに、考えたり、語ったり、思索したりして、あるいはそれを書きあらわし、あるいは他人にそれを伝えたり、時には知人や新聞から同時代の人々がなしつつあることを学んだり、また印刷された言語によって過去の人々と交流し、彼等の霊を今日に生かすこと等々——これが人生の驚異でなくて何でありましょう。」

又、「心にとって言葉は、目にとっての光以上のものである。」との考えから、アニーはヘレンに、指文字をきびしく、積極的に、忍耐強く教えていくのです。

芝居の最後の場面で、井戸のポンプから出てくるつめたいものに“WATER.”という名前があることをヘレンが自覚します。この一つのことを理解することによって、ヘレンの目の前が無限のひろがりを持ち、心が開けていくのです。あたえられた新しい心の目をもって、すべてのものを見るようになるのです。

ヘレンが自分のものにする「新しい心の目」と、俳優がそこで掴むそれまで自分の中になかった想像力と感受性、観客の心にめばえる自己への問いかけが一体となり舞台を通しての同時代を生きる人間同志の交流が生まれます。

『奇蹟の人』の舞台はここで終わります。観終った後に、観客にすがすがしい感動を与え、人間に生きる力を与える芝居です。でもそれですべてが終りでなく、観客にとっても、俳優にとっても、そこから又、新しい出発があるのです。

自分自身に問いかける

『奇蹟の人』の舞台は、こんな仕事を全国のいろいろな場所で行ってきたし、これからもつくりだしていきたいと考えていける、大きな希望のもてるものです。

最近、観て頂いた高校生の感想文をいくつか紹介します。

- 「何不自由なく生きている自分が恥ずかしく、生きていく上で大切なことを学びとることができた。生きていく以上、精一杯自分の力を出し、もっと前向きに生きて行きたい。今、自分の未熟さをつくづく思い知らされた。」
- 「これほど素晴らしいものだとは思わなかった。サリヴァン先生の強い精神力、信念、根性に心を打たれた。最後の場面では思わず目がしらが熱くなった。5体満足の自分を幸せだと思うと同時に、これから先もっと自分をみがかなければだめだと思った。」
- 「私達が東京演劇アンサンブルの公演をみるのは今回で2度目、観劇していいようなない感銘を受けました。

サリヴァン先生の努力がやっと輝かしい光となってむくいられた。ヘレンが狂ったように物の名前をたずねる場面では思わず泣いてしまいました。人間はどんな苦難があっても努力し続ければ、最後は必ず光を見ることができると知りました。」

これらの感想からも分りますように、観客は自分自身に何かを問いかけています。すぐに解答が出るものではありませんが、この感動を得た気持が、何かのきっかけで観客の中で芽を出すことが必ずあると確信しています。

私たち東京演劇アンサンブルは、こんな期待を持ち、それを自分たちの問題として環元させながら、全国いたる所に、これからもどンドンいろんな場をともに作りだしていきたいと考えています。

80年の仕事

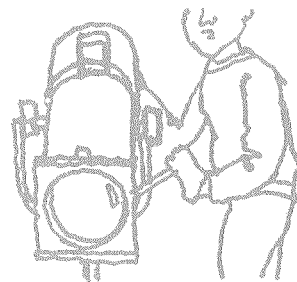
79年秋に『奇蹟の人』で沖縄公演を行った劇団の仲間には、そのパンフレットの中で、

「退廃はどこからでもはじまる、ここまできたらもう安心などという安全圏もない。ぼくら自身の中に修羅場をつくりだしていきたい。そしてそれらの仕事は行きすぎを恐れず、子供が遊びに熱中するような気軽さで楽しみながらやっていきたい。」

と、劇団のこれからの仕事の方向を語っています。

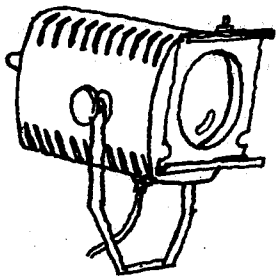
この仕事を、『奇蹟の人』の舞台を通して続けていきます。80年は、東北、関東、信越、東海、81年は中国の各地域で公演を予定しています。

演劇教室を計画している全国の学校の先生方に、東京演劇アンサンブルは『奇蹟の人』を自信をもって推せんします。たくさんの人たちに観てもらいたいと思います。



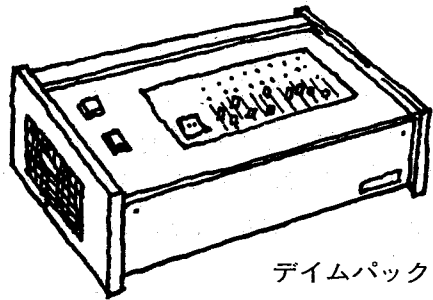
東京演劇アンサンブル公演の
「奇蹟の人」の舞台でも

マルモの照明器材が活躍しています。



CEC型500W

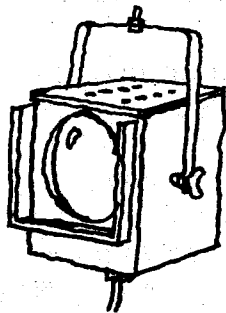
●シーリング、タワー、フロントサイドスポットライトにはCEC-500Wスポットライトが、又サスペンションには、T-1,500WとDF-500Wスポットライトが使用されています。



ディムパックT-15

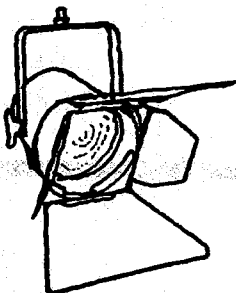
●客席上手には携帯用調光器ディムパックT-15、補助用にディムパックT-6が、舞台の演技を見ながら2人のオペレーターによって操作されています。

●⑩ケラー夫妻の居間と⑩狩猟小屋アニーとヘレンのからみの景では、特にFQ-1,500Wが使用され効果をあげています。FQ-1,500Wはフレネルレンズ、ハロケンランプを使用した効果的なスポットライトで、地明りとして従来の3,000Wに匹敵し、TVスタジオや音楽ものの舞台に使用されていましたが、最近芝居にも数多く使われるようになりました。



T-1型500w

EQ型1,500w



●いづれのスポットもコンパクトで、多目的に使用できる利点があります。

価値あるものを残したい、それは卒業生の願い

時代は変わり、贈り物は変わる！

卒業記念の後輩たちへの贈り物は、単にモニュメントとしての記念品より、本当に後輩たちが活用できる品を選ぶ時代へと変わって来ていると言えます。照明器具は演劇部の活動をより素晴らしくするばかりでなく、それは学校生活の文化活動、たと

えば講演会や入学、卒業式などの学園生活のセレモニーに欠かすことのできない必要器具となりつつあります。学園生活をより創造的に演出するのが照明器具と言えます。卒業記念の新しい価値ある贈りものとして照明器具を考えてみませんか！

ライトマン通信

●編集部ではあなたからの〈おたより〉をおまちしております。

私達は団員20名で活動しております。今年は5月、11月に公演を計画し、稽古にはげんでいます。私達の夢は、釧路近郊の町村、特に演劇に触れることの少ない過疎化の進んでいる所で演劇を上演したいと思ってる事です。その為、備品（特に照明器具、幕）の充実と、稽古場の建設を年次計画をたてて進めていますが、稽古場の建設は赤字公演がここ2本続きまして、思っ

たように進んでいない状態です。しかしこの広大な北海道の釧路の地域に根ざし、アマチュアの持っている有為性を発揮し、牛歩のごとく着実に進んでいきたいと考えております。今、釧路は毎朝氷点下15度以下の日が続いております。もし釧路においでになるような機会がありましたら、お立ち寄り下さい。

釧路演劇集団事務局 尾田 浩

編集室

●今号は東京演劇アンサンブルのご好意により奇蹟の人をテーマにさまざまな角度から舞台照明について考えてみました。脚本を読んだり舞台を实际みてみると一層理解できることと思います。

●次号から小川昇氏の「舞台照明の基本」を連載する予定です。

●又東京芸術座「翼を心につけて」をテーマにした舞台照明の実際について掲載します。

●丸茂電機創立60周年記念行事の一環として、昨年11月から12月初旬にかけて、東京をはじめ、全国の5会場で

「MARUMO-LITING-FAIR.—80年代に飛翔する技術のすべて」をテーマに開かれました丸茂製品の展示会に、多数の方々のご来場をいただきありがとうございました。この展示会で操作実演されました新製品記憶付調光装置ユニファイル・ワイヤレスコントローラには、多くの方々の関心が寄せられていました。光の時代といわれる現代、これからも世界の丸茂にふさわしく、照明器具の開発、改良に全力投球していききたいと思います。

●〈ライトマン通信〉欄を設けました。みなさまの活動状況やご意見又、照明器材・照明器具設置のご相談等なんでも結構です。お便りをお寄せ下さい。

●発行———丸茂電機株式会社

東京都千代田区神田須田町1-24
☎101 Phon東京 (03) 252-0321代

●このニュースは弊店からお届けします。